

慈眼寺たより

第6号

平成21年7月
春日井市下市場町
「慈眼寺」

電話 81-6801
編集 伊藤秀文

☆妻へのメッセージ☆

伊藤眞二

君の病は現代の医学で根治できない難病である。発症の経緯も不明であり、終生病気との共存に努めるしかない。

静かに、緩やかに進行する病状。一〇年から二〇年と続き余命を短縮する性格ではないとされている。人生の後半を闘病生活に埋没するわけですが、僕の心境としては、明るく楽しい環境を構築する為に、家族共々一致協力する覚悟です。

この病気は、中脳の黒質から分泌されるドーパミンの欠乏に起因する。故に投薬によりドーパミンの供給を欠かすことは出来ない。

全国で十二万とも言われる患者の一人になってしまった。治療が本格化したのはここ十年位である。ジェームス・パーキンソンがその著書で病名を明らかにして略二百年になる。今般「慈眼寺たより」の寄稿に当たって、僕の介護生活から皆様にパーキンソンの症状を知って頂きたいと思います。

パーキンソン病の認定を受けた

のは平成七年五月に遡ります。それ以前から体の変調を訴え通院生活を続けておりました。長男を出産してから、かれこれ四〇年の歳月が流れ、その間高血圧の治療をずっと欠かすことなく続けております。最初の入院は平成一〇年二月二三日から五月一〇日まで、右足膝関節に人工骨挿入の手術を受け、順調に回復したかに見えたが、後遺症として膝を曲げることが困難になり、社会復帰をあきらめざるを得なくなりました。パーキンソン病の治療は認定後、投薬による対症療法を受け続けており、新薬の開発により近年その症状は大幅に緩和することが出来るようになった。

平成二一年新春、病歴一四年目を迎えた。多様化する症状、薬の副作用により心身の消耗、体重の減少と毎日の転倒が重なり、車椅子での移動に依存することとなった。紙オムツ使用で洗濯の労度を軽減、炊事・買物・掃除と介護生活にも重圧がのしかかってきたわけです。

君は二〇歳で嫁いできた。許婚で親の意思を尊重し、サラリーマンの

僕と結婚した。農家の嫁は重労働を強いられ、子育ての傍ら忙しい日々の連続で、あっといふ間の三〇年間であったと思う。意思堅固で頭脳明晰、良妻賢母ぶりを発揮した。長女（岐阜薬科大学）、長男（京都大学経済学部）の二人を世に送り出した。農業の近代化は圃場整備に始まる。国庫負担率五五％は魅力的であった。大規模農業への足がかりとなった。機械化、省力化の恩恵で労力は画期的に減った。区画整理による農地の減少、宅地化への転用、土地の運用により隔世の感を味わう。非農家へ限りなく近づいて税負担も大きくなった。

君は環境の変化に順応しながら、揺れ動く小船で大海原へ漕ぎ出していくようだ。六七歳、まだ天寿までは長い道のりがある。医学の進歩に一縷の望みをかけて頑張っている。

転院を決断（後になって君の同意を得た）して平成二二年三月五日に春日井市民病院から久保田脳神経外科クリニックへ転院。新しい病院での検査が始まり、病気の全容が判明することを希うものです。

君に贈る言葉

「青春とは人生のある期間を言うのではなく、心の様を言うのだ。年を重ねるだけで人は老いない。理想を失うとき、始めて老いがくる。

サミュエル・ウルマン」

《青柳歌壇・俳壇》

寺の庭

梅が晴れ着て お出迎え

柿七つ

枝に残して 客を待つ
田畑耕作

初生りの

豌豆湯がき 仏壇へ

そよ風や

新茶を買いに 自転車
伊藤貴美子

おつとめに

唱和しはじめ 村の蟬

咲く桜

咲く涙一つ 咲く桜
伊藤清雄

幾年も

桜咲くたび 嬉しくて
秀

今在るは だれのおかげと
ふと思う

遠い縁に 近く
今井正

☆私の思い出の慈眼寺★

伊藤辰男

昔の下市場は竹藪の多い部落で、お宮様もそうでしたが、殆どの家が竹藪で囲まれていました。お寺も東西南北が竹藪でした。自動車の通れるような道路は、篠木小学校の方から寺裏までのものが一本あるだけでした。その先はリアカ道が繋がっているだけです。

お寺に入るには、寺の西側の狭い道を南へと廻り、山門へ入りました。その山門前の右側の藪の隅に、村一番と思われる枝振りの桜があり、花の頃にはよく見に行ったものです。

本堂の西側はお墓になっていましたが、墓も通路も狭く、お盆とかの参拝の時にはとても混雑して、落ち着いてお参りも出来ないような有様でした。

その葺めき並ぶ石塔の中に、太くて高い松の木が三本ありましたが、伊勢湾台風で倒れ、そばにあった観音堂も押し潰されました。本堂そのものは、昭和二十七年に藁葺きからトタン葺きに改築されており、一番風当たりの強い場所に建っていたにもかかわらず伊勢湾台風ですら倒壊することもありませんでした。これはひとえに仏様のお守りがあったからだと思っています。昔は、村に集会場が一箇所もな

かったので、大勢の人が集まる寄り合いや集会、習い事などにはすべて本堂を借用して使っておりました。また、提灯山盆踊りを青年団が主催で行っていました。これもお寺の広庭に柱を立てて提灯を吊り下げたものです。なんの娯楽もない当時は、提灯山ともなると他所の人達も大勢見物に来られたものです。お盆で里帰りしていた方たちの旧交を温める場にもなっていたでしょう。ご先祖様をふくめて皆さんの憩いのひと時でした。また十軒ほどの夜店も並び、アセチレン灯の青白い光の下で店棚には子供たちの夢がならんで賑やかでした。



遊戯や娯楽のない時代には青年団が主催で寺の境内に演芸場を作り、年一回の演芸会を実施したものです。「父帰る」という文芸物が上演されたこともありました。何の芸もない私共にも、歌に踊りに漫才に何でもいいたと、不慣れな芸に出演させられた思い出の場所であります。

また、下市場消防団というのがありました。毎年、正月の五日くらいに篠木地区の出初式に参加し、そのあとお寺で総会を兼ねて宴会を行っていました。自分たちで庫裏の大きな釜で飯を炊き馬肉などで料理も作ったものです。いろいろと勉強になりました。ある年の出初式総会の際に、今は亡き先輩が、席上大喧嘩をして火の入った火鉢を畳の上に叩きつけて、火鉢は割れ火と灰がたたみ一面に飛び散って、大騒ぎになり必死で後始末をしたことは、今も尚忘れることは出来ません。

この様に昔のお寺は、仏事のみならず会議場や集会場あるいは演芸場として村の生活の一部になっていました。

時の移り変わりと皆様方のご尽力により、先には下市場区画整理によって町内が整備され、お寺の周囲は広い道路に囲まれて、いずれの方向からも山門への到達ができるようになりました。墓地も、お寺の南の方に移転され、整然と整備され、また駐車場も完備されて悠々とお参りが出来るようになりました。

平成十四年には皆様方のご尽力とご寄付によって立派な本堂と客殿が出来上がり、本当に喜ばしく思っています。

お盆のお知らせ

① 棚経の日程

八月十二日 浅山、鳥居松

勝川、名古屋方面

八月十三日 四谷、南部

熊野、神領方面

八月十四日 下市場、穴橋、掘北

八月十五日 穴橋、関田、上条

高蔵寺、坂下方面

右は原則です。去年まで**八月十五日**だった方は、変更になってい

ますので、ご注意ください。

② お施餓鬼

お施餓鬼は、毎年八月十八日で今年火曜日になります。七月一日から受付をしております。早い時間帯は、予約済みになっております。ご希望の方はなるべく早めにお申し込みください。電話で結構です。お布施は今までどおり

で、初盆施餓鬼 五万円

特別大施餓鬼 三万円

大施餓鬼 二万円

合同施餓鬼 一万円 です。

③ 精霊流し

八月十五日の午後四時半から慈眼寺の山門で、檀方総代の方をお願いして集めてもらっております。また、供養のうえ処分しております。明るいうちにお持ちください。

☆ 雑感 ☆

住職 春日井浩道

最近、テレビで精神腫瘍医というのを紹介していました。精神科のお医者さんなのですが、それもガン宣告を受けた人を専門に診る精神科医なのだそうです。日本では、約半数の人がガンで死ぬといえます。また最近、医者もあっさりガンで告知をしているようです。告知をされた患者の三割ほどはうつ状態になってしまうのだそうです。その人たちの心のケアをはかるのだということです。

確かにひと昔前までは、ガンは恐ろしい病気とされていました。ほんの数年で命をなくしてしまうような、まさに死刑の宣告を受けるようなものだったのです。それこそガンと落ち込み、極端な場合には絶望して自殺してしまった高僧の話もありました。

そんなわけだから、昔はガンの告知は家族にはしていましたが、本人には適当な病名でごまかすことが多かったようです。胃がんを胃潰瘍とってみたりです。しかし、これだけ色んな情報があふれるようになると、いくら隠しても隠し通せるものではありません。ガンであるかどうかは、本人が一番知りたい事柄です。どんどん疑い深くなっていき、患者と家族の

信頼関係まで壊してしまします。

慈眼寺の先代・黙定和尚はちょうど十三年前の今頃、悪性リンパ腫という血液のガンにかかりました。このころは直接本人への告知はありませんでした。結局、市民病院からガンセンターへ転院しましたので、おそらく本人は自覚したのだと思われます。ただ「俺はガンだろう」という問いかけもありませんでし、こちらから積極的に「ガンだよ」と知らせることもありませんでした。やはりお互いに話題にすることを避けていたように思います。ですからなんとなく奥歯に物の挟まったような、すわり心地の悪い気分が続いていました。本当のことを知らせずに済むのならそれに越したことはない、今でも思われてなりません。ガンセンターという病院の名前が大変に恨めしく思われたものです。そこにいること自体が、ガンであるという何よりの告知になってしまっているのですから。

それが最近はずぐに告知しているようなのです。どうせ隠し通せないのだろし、また隠していたことが後になってばれたりすると、逆に医者の責任問題になったりするところがあるようです。医学上の情報は全部知らせてあげるから、自分の責任で治療方針を決めなさ

いということなんでしょうか。しかしそんなことは一筋縄でいける話ではありません。どんな車を買うかというような選択の問題ではないからです。車なら何度でも買い替えができるのですが、自分の命はやり直しがきかないのです。これほど重い選択はないでしょう。悩んでいる間にも時間はどんどん進行してしまします。悶々とした日をすごさなくてはなりません。そこで冒頭のような医者が必要となってくるのです。

思うに、半数がガンで死ぬような時代に、ガンを告知しないのはやはり不自然かも知れません。ガンであることをはっきりさせれば、思い切った処置も取れることでしょう。合理的な選択もできるでしょう。しかしそうするためには、そんな危機的な状況でもきちんと判断できる心構えが必要なのです。日頃からトレーニングしておかないと、パニックしてしまいそうなのです。自分の命の決定は自分ですするというのが個人主義の原則なんでしょうが、本来、自分で決めて生まれてきたのではないのだし、そう何もかも自分で決定するのがいいかどうか、またできるかどうか、実は私には良く分からないのです。医者という職にある人が責任回避しているだけと思

えなくもないのです。

責任回避といえば、政治家という人種は、自分が責任で決めなければならぬ事項を有権者の判断にゆだねることがある。プロの政治家が判断して結論が出にくい事柄を、素人の有権者がうまく判断できるはずがないではないか。有権者は、政治家が自信に満ちてさっそうとしているか、うそつきでないか位しか見分けられないのです。ヒトラーが選ばれたのも、そんな事情だったのでしょうか。だから、あとで結果が悪くなると、国民の選択した事だと政治家が弁解することは許されないと思います。裁判員制度というのも裁判官の責任逃れという気がしてなりません。プロの裁判官が判断してもなお冤罪が出るようななら、「疑わしきは罰せず」という原則が守られていないのです。そんなことに忙しい国民を巻き込んでほしくないと思っています。

暑中お見舞い 申し上げます

檀方総代

伊藤辰男
伊藤秀文
伊藤正廣
伊藤正
大野和義
大野悟
木村広孝

◎ 曹洞宗について ◎

日本に現在の仏教の形が出てくるのは、今から九百年くらい前の平安時代の末から鎌倉時代といわれています。仏教の形が日本に伝わったのは約千五百年ほど前のことでしたが、しばらくは豪族や国家の権力や権威の見せつけの手段であったり、学問、文化の研究施設であったり、はたまた野心家達の出世の手段であったりで一般民衆とはかけ離れた存在であったようです。

鎌倉期になると、意欲的な僧侶がたくさん現れて、それこそ衆生済度に向かって、多くの教団、教義が形成されていきます。他力本願の浄土教、自力で悟りを求める禅宗、個性あふれる日蓮宗派など。これらはみな比叡山延暦寺で学んだ僧侶によって始められるのですが、比叡山という権威を蹴飛ばして立てられたものであるため、当初は政府や比叡山から迫害弾圧されます。

わが曹洞宗は禅宗の一派で、やはり比叡山で修行し、当時「宋」といった中国に留学した

道元さまによってもたらされました。「曹洞」というネーミングは、「曹溪」という高僧の名前と「洞山」という地名に由来するともいわれています。禅宗には曹洞宗のほかに栄西さまの臨済宗、江戸時代の初めに日本に伝わったインゲン豆の隠元さまの黄檗宗（おうぼくしゅう）柏井町の慈眼寺など）があります。

その道元さまはじめは京都で寺を開きますが、比叡山の迫害が激しくなると、越前の地頭であった波多野義重の庇護のもと、その地に大仏寺（すぐに永平寺と改名）という修行道場を開きます。今でも山深い所です。七五〇年以上も昔はさぞかし大変な秘境だったことでしょう。道元さまの歌に「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪冴えて 涼しかりけり」というのがありますが、まさしくそんな自然以外は何もない、修行の地としては最適の所だったのでしょう。さてこの道元さま、日常生活が即ち修行だ、座禅をすることが即ち悟りだというような方針で、弟子達にと

ても厳しい修行を要請されました。永平寺二世の懷奘（えいしよう）という人でさえ、何で座禅をするのか良く分からんと言ったそうです。それはともあれ、道元さまはこんな姿勢ですから、曹洞宗というのは修行の一派であって教団を形成するような状況ではありませんでした。曹洞宗が教団として発展するのは、永平寺から出て後に能登の総持寺を開かれた瑩山さまの努力によるものです。このため曹洞宗では、永平寺と総持寺を両本山とし、道元さまを高祖、瑩山さまを太祖（あわせで両祖といいます）と呼び習わしています。両本山、両祖が無ければ今日の曹洞宗は有りえなかったということでしょう。そんなわけで、曹洞宗の寺院はほとんどが総持寺の末寺（その寺からでた僧侶が新たに開いた寺院）に当たります。

慈眼寺は、総持寺から直接分かれた遠州森（石松の方が有名です）大洞院という寺の、その末寺である小牧市大草の福厳寺の末寺に当たります。つまり総持寺のひ孫寺に当たります。

★ あとがき ☆

五月に体調を崩して入院しました。健康には自信があったのに、草刈するにも足元がふらつく始末。これはおかしいと病院へ行ったら、なんと頭の血管から出血しているとのこと。さっそく手術。頭にドリルで穴を開け、中の血を洗い流して後は養生するだけ。それでもはじめての手術だったので、死ぬほど恐ろしい思いをしました。

出血の原因はどうやら、機械の下へもぐりこんだ時に頭を打ったことらしい。よく有ることだそうですが、年取ると血管が脆くなるので、皆さんも用心してください。（編集子）
また何か取留めの無いことを書いてしまいました。人間の理性などいくら頑張ってもなかなか大変だと言いたかっただけです。（住職）

「慈眼寺たより」 第六号

平成二二年七月一〇日 発行

ホームページ

← <http://www.ma.ccnw.ne.jp/jigenji/>